

## 『今村・別役刀剣講話』から「古刀に化ける新刀」について

伊藤 三平

今村長賀は、土佐藩出身の明治の愛刀家・鑑定家で宮内省御剣係も勤めた。別役成義<sup>べつちやく</sup>も同じく土佐藩士出身で軍人として少将まで立身した愛刀家である。2人が刀剣会で交替して話した内容が『今村・別役刀剣講話』として出版されている。

今村長賀は正宗抹殺論のきっかけを作った人物であり、この中でも在銘が少なく、加えて在銘品に出来の良いのが少なく、しかも短刀までが無銘が多い相州伝名工に疑問を持っている。これは別役成義も同様である。

(注) 磨上げする必要もない短刀は、銘があることが不都合という動機(例えば村正は徳川家に祟るとして摺られる)以外には無銘は存在しないと思う。献上打ちと言いつける人がいるが、献上打ちがあれば、それ以上の在銘品も併せてないとおかしいし、相州伝の多くの鍛冶が献上ばかりしていたのであろうか? 同時代の名工・備前景光と比較してどうなのだろうか? この点、明治人の今村氏、別役氏の方が現代人より近代的かもしれない。

今村長賀が第27回の講話として「竹屋寿竹著「察刀規矩」のこと」を紹介している。竹屋寿竹とは享保から天明にかけての徳川家の御研師である。「察刀規矩」には研ぎのこと、鑑定のこと、鍛錬方法なども書いてあるが、その中に偽物のことも触れている。「余(竹屋寿竹)が確かに見、確かに知りて疑いなき類をあらまし抜粹して、察刀規矩の末に増補する」として次のように、「新刀可変古作鍛冶」をあげている。

大与五水田国重……郷義弘 正宗ニ変ス  
 砦部水田国重……薩州正清 安代 其他薩摩打ちニ変ス  
 同 為家 ……右同断ニ変ス  
 江戸水田国光……肌物ハ則重ニ変シ、肌無キハ相州行光 正宗 貞宗ノ類ニ変ス  
 肥前忠吉初代……出羽鉄ニテ打タル直刃ハ延寿一統ニ変ス  
 山城守国清 ……中心ニ菊ヲ切タル細直刃ハ来国光 延寿並ニ新藤五国光ノ類ニ変ス  
 出羽大掾国路……正宗 貞宗ニ変ス 能ク変化ノ術ヲナシタルハ目ノ不及所アルモノニ  
 テ正宗ニ拵ヘ直シ高代トナリタルモノアルヨシ  
 飛驒守氏房……相州行光 正宗 貞宗 郷義弘 則重ノ類ニ変ス  
 若狭守氏房……右同断ニ変ス 一ト通りニ位立ヌレバ真改 丸津田助広ノ類ニ変ス  
 越前康継初代……細直焼ハ来国光ニ変シ 合口ハ栗田口吉光ニ変ス  
 同 三代 ……正宗 貞宗 郷義弘ノ類ニ変ス  
 同 五代 ……右同断ニ変ス 又ハ堀川国広 相州行光ノ類ニモ変ス  
 同 六代 ……右同断ニ変ス  
 石堂是一・善四郎一峰…一文字 長光 忠光ノ類ニ変ス  
 越前兼仲……柁目鍛ニテ帽子ハキカケ焼ツメ見ユルトキハ保昌五郎ニ変ス 如此ア

## ラサレバ繁慶ニ変ス

今村長賀は、上記の新刀鍛冶が古刀に変えられる可能性を肯定しつつ、氏房を相州上位に化けさすのは手間だろうとコメントしている。そして、その外に、和泉守兼重、法城寺國正、正弘、大和守安定、越前物のよく出来たものなどが虎徹に化けており、水田国重の肌荒き沸づきの豊富なものが繁慶になり、加賀兼若の上三代の作刀で柁目鍛、乱れ刃、砂流しかかり良く出来たものは大和志津に、そして肥前傍系が肥前忠吉本家の上三代になっていると記している。

別役氏は第 28 回「真改一族について」で「真改、助広には割合に弟子打ちの品が世上に少ないのと、真改、助広にはほとんど真物に近い偽物がたくさん世間にあるところより考えて見ますと、弟子打ちの通用の悪しき在銘物をどしどし磨りつぶして、師匠の銘を彫って世人を欺いている」と述べている。

また別役氏は第 29 回「三品物について」において「京初代丹波の良く出来たものや、初代越中正俊の良く出来たものは、古刀の上作（相州物、信国）に変じているものが往々あります」と述べている。

続けて第 30 回「刀剣の模造について」において、室町期のものよりは「慶長のころより古作を模倣することが大いに流行をしはじめて、このころは正宗ならびにこの一門の流行時代であったから、ことに平造りなどは相伝を模したものと見えて」として堀川一門、三品一門、越前諸工、南紀重国、大与五国重などによる偽造の話をしている。

また第 31 回「刀剣の偽物について」でも、別役成義が竹屋寿竹の「新刀可変古作鍛冶」を受けて、加えて以下の刀工も偽造に使われていると書いている。

越中守正俊……………正宗、貞宗、志津または信国に变ず  
肥後守、播磨守輝広…志津一派または大和物の類に变ず  
加賀守貞則……………信国、了戒または埋忠、国広、虎徹に变ず。  
大和大掾正則……………信国、了戒、大和物の類に变ず  
南紀重国……………来または延寿のごときものに变ず  
仙台国包……………保昌の類に变ず  
薩州正良……………正宗、貞宗、郷義弘、志津に变ず  
伊賀守金道、和泉守金道…志津または長谷部のごときものに变ず。  
新刀上々作以上のものは、その門下の作品

ここには出てこないが、駿河島田物なども、沸出来の良い短刀を拝見したことがあるから化けているのかも知れない。肥前の伊予掾宗次も凄いのがあると聞く。

この小論は、ある刀屋さんと大与五国重のことを話題にしたことから始めたが、別役

將軍は第13回「続・青江物について」の中で、「大与五の出来は、地肌のある小沸のよく出来たものは則重に似たり、と古人も評してあるぐらいの名人であります、古刀にされており、存外稀なものです」と続けている。

そこで、実際に大与五の刃紋がどうなのかを確認してみたい。

『日本刀工辞典 新刀篇』（藤代義雄 著）に大与五国重の刃紋が掲載されている。説明に「互の目大乱れ荒鉾つき華やかにして薩摩新刀の如く特徴としては棟焼があることであろう」とある。

本間薫山氏の『鑑刀日々抄』のシリーズには、大与五も含めて新刀の国重が以下のように掲載されている。

- ①『鑑刀日々抄 続』の410頁に水田国重の刀が掲載。互の目が目立つ刃紋であり、小板目、大肌・地景目立たず、地沸強く、荒沸あり、随所に飛焼をみる。沸よくつく、荒沸散り、こごる。金筋も地景同様さまで目立たない。繁慶、薩摩刀に比べて地景、金筋が少ないとコメントがある。
- ②『鑑刀日々抄 続』の440に薙刀造りの脇差が掲載。水田住国重で俗名がないが大与五だろうとしている。小板目、柁気細かに交じって詰まり、地沸強く荒めの沸目立つ。鎗地柁流れる。刃は沸深く、荒め多く交じり、大のたれ調で随所に足入り、葉目立つ、飛焼を見るとある。
- ③『鑑刀日々抄 続二』の417頁に大与五国重が掲載。流れ柁交じり、湯走り・飛焼き多く鎗地にも及ぶが、この工は地景不足とコメントしている（以下で地景が入る国重が出てくるので地景不足とは言えないと思う）
- ④『鑑刀日々抄 続二』の595頁に寛文八年紀の大与五右衛門国重が掲載。板目流れ柁交じり、地景それにつれて太くよく入り、湯走り・飛焼きあり、地沸よくつく。匂を深く敷いてよく沸づき、荒めの沸交じり、棟焼きもある。本歌に比較して地景の光がにぶく、沸の美しさにも大差があるとコメントしている。
- ⑤『鑑刀日々抄 続三』には309頁に山城大掾国重が掲載されていて、棟焼きはあり、鎗地は柁とあるが、相州伝上工にありそうな刃である。

私は知らないが、刀装具同様に刀もよく観る知人は「棟焼きは消せて、反りも簡単に直せる」と言われる。鎗地の柁を目立たないように樋でも彫れば相州上工に化けそうな刀であることは間違いがない。

正宗抹殺論を破った本間薫山氏は、相州伝本歌と大与五では、地景の光、沸の美しさに大差があると言うが、相州上工に極まって重要刀剣になっている刀でも、本間薫山氏が述べられるような「地景の光が美しく、沸が美しいもの」は少ない。「こういう所は〇〇に見えないことはないですね」という相州伝上位が多い。

今は、日本美術刀剣保存協会が重要刀剣に指定していれば良いとして購入される時代である。そして、それには経済的価値が付いて流通しているから、それで仕方ないと思う。

個人がそれぞれに判断するしかない。私は、名刀を多く拝見して、地景の光、沸の美しさを備えた相州伝のあるべき基準を自分なりに確立してから、相州伝上位を購入するべきだと思う。

そして、短刀の無銘は論外だが、何で無銘なのか、磨上がっているのならば原寸ほどのくらいか、それは在銘品として残っているものの寸法と比較しておかしくないのかという問いをすべきだと思う。

相州伝ばかりが化けているのではない。山城伝も同様だ。先人が越前山城守国清や大和太掾正則を評価して、改変の可能性に言及しているが、これら刀工には良い御刀があるということだ。また越前康継、南紀重国の細直刃などは、なるほど怖いものだ。

青江も怪しいのが多いと思う。私が拝見した平高田の在銘品は中青江に見えた良い御刀だし、畏友のH氏は初代兼若の青江に見える御刀を拝見したことがあると言う。三原も無銘は大和風の直刃ばかりを極めることが、在銘には青江と変わらないのがあると聞いた。

備前は在銘品が多く、刀身だけでなく銘も本物と比較しやすいが、幕末の桑名打ちは未備前の偽作で名高いし、畏友のH氏は無銘一文字で現代刀と思えるものを観たと言う。

私が若い時は「無銘は一格下げて極める」と言われていた。今は逆のような気もしている。特別重要刀剣の志津を茎先を剣形に改変するなどして重要刀剣の正宗にしたり、『虎徹大鑑』で偽銘とされていた截断銘を真に見えるように改竄して重要刀剣にする時代であり、先人に申し訳ない。

もっとも真偽の判断は難しく、私ごときではお手上げである。それらしい所を見ると、それらしく観てしまう。そこに証書や鞘書があればなおさらである。だから偽物を買って「これも勉強だ」と諦めることも必要なのかも知れない。ただ、これまでの経験で「頭」（見所など知識）ではなく、「心」で感動したものは間違いがないように思うが、「心」はその時の心境（最近は買っていないとか、周りの勧めや、懐具合、褒められての見栄など）にも左右され、そこに「欲」（証書・鞘書・箱書の有無など）も入り込みやすく、これも当てにはならないところがある。

美術品収集につきものの病気、副作用としてあきらめるしかないのかもしれない。